

## JOMF 派遣医師便り (2014. 9)

### ◆マニラ◆

## 台風グレンダ 2014 年 7 月 16 日 “朝の出来事”

マニラ日本人会診療所

菊地 宏久

2014 年 7 月 16 日、最大瞬間風速 60 メートルの強風を伴った台風グレンダが早朝からマニラ首都圏を直撃した。後日の報道によれば、マニラ国際空港は一時閉鎖され、広域の停電、死者 100 名以上、負傷者 300 名以上という大きな人的被害ももたらされた。

当日朝、診療所への通勤途中でマニラ市内の大きなビル内での緊急避難を経験した。通常から避難所の確認や安全確保対策をしておくことの重要性を再認識したので報告する。

7 月 16 日、いつも通りに朝 7 時ころ診療所へ行こうとコンドミニアムを出ようとした。ところが玄関のセキュリティに「今は危険なので止めたほうがよい」と腕を持って止められた。「そうはいかない」と無理に振り切って玄関を飛び出したが、傘はキノコ状態になって全く役に立たない。ゴーゴーという暴風雨と共に空から木々の小枝やゴミが吹き飛んでくる。半分壊れた傘をさしながら、吹き飛ばされないように風を押し歩いた。左右の道路の大木が根っこごと持ち上げられ、無残にもなぎ倒されている。強風が右から左から、前から後ろから体を吹き飛ばす。10 メートル歩くのも容易ではない。周囲には人っ子一人歩いていない。500 メートルほど歩いたところで「この状況は極めて危険だ、安全な場所へ避難すべき」と判断した。ちょうどその時、目の前の高層ビルの入り口にヘルメットを被ったビルのセキュリティが何人が集まっている。何か緊張感がある雰囲気だ。何かあったのかな！と寄って行くとセキュリティが雨の中をあわてた様子で近寄ってきて「危険だ、危険だ、ビルの太い柱の陰に隠れなさい」と大きな声で誘導してくれた。

当初は“台風のため危険だ”と言っていると思っていた。しかし“更なる理由”があった。

ビル内に入っていくと何本もの太い柱の裏側にすでに多数の人がなぜか“同じ方向”に向かって身を隠していた。30 分ほど経つと避難者数が 100 名を超すようになり柱の陰に隠れるだけではスペースが足りなくなった。ここでは狭すぎて危険だ、どこか皆が安全に避難できる場所はないかセキュリティに頼んだ。セキュリティは「さらに安全な場所へ」と地下の部屋に誘導してくれた。そこで数時間の避難生活を余儀なくされた。その避難所では携帯電話で家族と連絡を取る人、会社へ遅刻を詫びる人、携帯電話でゲームをしている人、ヘッドフォンで音楽を聴く人、グループになってダンスを踊る人など様々いた。セキュリティに、これ以上人が増えた場合の安全な場所、飲料水の確保、出口、トイレの場所などを確認した。

数時間経った頃、暴風雨は峠を越えてきた。“診療所へ行かなくては”と地下の避難所から地上の左出口へ向かおうとした。ところがビル1階の高い横壁が10m四方に渡り完全に崩れ、壁全体が今にも内側へ倒れ崩れそうになっている。風がビルの中に強く吹きこんでいる。暴風雨の中を大勢の工事の人々が、その倒れかかった壁をロープやジャッキを使って固定しようとしている。壁崩壊による二次災害を避けるため、遠回りだが右出口を迂回し、ビル敷地からどうにか脱出した。

セキュリティ達の行動は、崩れ落ちそうな巨大な横壁に対して取られた予防対策だった。「通っては危険だ」とビルの中に誘導されたこと、「避難者が皆“同じ方向に向かって”大きな柱の裏側に隠れたこと」、「頑丈なコンクリートの地下室へ誘導されたこと」、これらはすべてが“万が一壁が崩落した時に備えた予防措置”であった。

結果としてはビルを安全に抜け出し、診療所にもたどり着いた。短時間であったが避難をさせていただいたビル関係者には心より感謝したい。一方で、あのビルが倒れていたら柱の陰に隠れていた人々はどうなったのか、地下にいた人々は無事だったのか、振り返るとぞっとする体験であった。

普段から災害時の安全な避難場所が確保できるように情報を更新し、避難訓練を重ねることが大切であることを再認識した一日であった。